

幼小連携の望ましい在り方を探る

- 幼稚園生活から小学校生活へ子どもの育ちを円滑につなげていくために -

幼児教育研究会議

研修員 大塚 明美（川崎市立新城小学校）

福島 知加子（川崎市立生田小学校）

根津 牧子（川崎市立生田幼稚園）

上田 純子（川崎市立新城幼稚園）

指導主事 吉岡 久美

主題設定の理由

幼児を取り巻く様々な環境の変化に伴い、子どもの生活経験や自然体験の不足、社会性の未熟さが問題になってきている。そのことにより、幼児期から児童期にかけての、より細やかな教育の必要性が高まってきている。このような背景の中で、幼児教育研究会議では、昨年度から「幼小連携」をテーマにして研究を進めている。今年度は昨年度の研究を基盤にしながら、幼稚園・小学校が更に相互の理解を深めていくとともに、子どもの育ちとそれを促す教師の援助について話し合いながら、その育ちを円滑につなげていくための幼小連携の在り方を探っていきたいと考え、主題を設定した。

研究の内容

1 相互理解を深める話し合いから

<幼稚園・小学校の子どもたち全般に共通していること>

- ・生活経験や実的な体験が少なくなっている。
- ・基本的な生活習慣や生活に必要な技術が身に付いていない子どもたちが増えている。
- ・教師や友達と上手くコミュニケーションを図れる子どもは、幼稚園や小学校で集団生活に適応していけることが多い。

上記のように、幼稚園・小学校に共通して日常生活に必要な生活習慣や生活技術があまり身に付いていないために、集団生活の中で戸惑いを見せる子どもの姿がとらえられた。生活習慣や生活に必要な技術は、生活の中で繰り返し経験することにより身に付いてくるものが多く、幼稚園や小学校での生活体験を見直す必要を感じた。また、『人とかかわる力』の弱さを感じる子どもがいるということも気になることである。そこで、本研究会議では、『人とかかわる力』の育ちを促すためには、教師が子どもとの基本的信頼関係を基盤として『心の育ち』を支えることが大切ではないかと考えた。

2 基本的信頼

エリクソンの社会的発達理論によると、「乳児期（0歳児）には人間や人間社会に対する『基本的信頼感』という心の基礎を築き、その上に『自律心』という床を積み重ね（1歳から2歳）『自発性・積極性・良心』という柱を立てる（3歳から5歳）というように心は育つ。それぞれの時期に固有の心の発達課題があり、子どもの心の発達には、『積み重ね』という特性がある。加えて、『その時期に獲得すべきとされている課題は、その時期が最も獲得しやすく、これを逃すと他の年齢では獲得しにくい』『適時性』という特性がある。」とされている。

このように、『基本的信頼感』は心の発達課題の基礎と考えられ、人とかかわる力をはぐくむためには、必ず獲得しておかなければならない課題である。

3 実践例

事例1 A幼稚園 5歳児

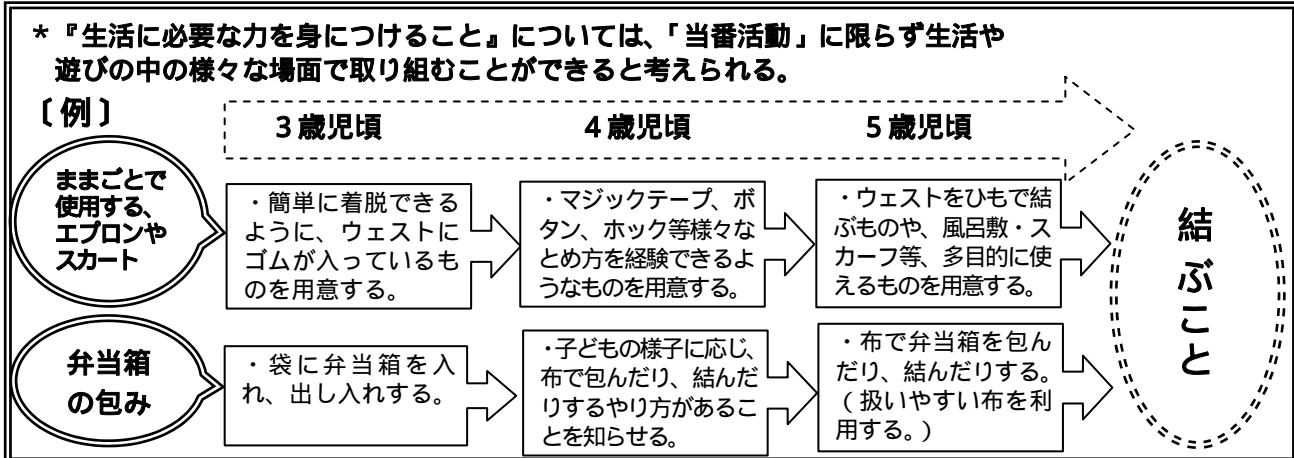
<p><活動名> 当番活動（テーブルふき） 5歳児9月～3学期</p> <p><ねらい> ・「洗う・絞る・ふく」ことを繰り返し体験することにより、自信をもつ。 ・「洗う・絞る・ふく」ことを身に付けていく。</p> <p><当番の仕事内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・お弁当のとき、毎回3人で行う。（3週間に1度、順番に当番が回ってくる） ・ふきんを洗って絞り、テーブルをふく。（一人2台ずつ） ・皆の前で、挨拶のリード役になる。

	当番の幼児が絞る様子	教師の援助	幼児の中に育つもの
9月初め	<ul style="list-style-type: none"> ・絞ったことがある幼児は自分なりにやるが、しずくがたれる。 ・力の入れ方がわからず握るように絞る幼児もいる。 ・ふきんを折りたたんで絞る幼児はあまりいない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児が絞りやすい素材のふきんを選ぶ。 ・その日の当番をみんなに伝え、大切なことを任されていると感じ取れるようにする。 ・幼児なりの取組を尊重して見守り、最後はしずくがたれないように教師も一緒に絞る。（個々の幼児に応じて援助し、安心して取り組めるようにする。） ・水がたれないことを確認し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい生活経験への興味関心 ・自分に任されることによる喜びと意欲 ・教師と一緒にいてくれることの安心感
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・要領がわかってきて、「自分でできる」と宣言する幼児が出てくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当番活動を繰り返す中で、できる限り、個々の幼児の取り組む様子を見守り、励ますようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「できる」という有能感
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・教師がついていなくても、要領よく絞る幼児が増える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・固く絞れるようになった幼児の様子を、みんなの前で具体的に認める。 ・できるようになったことを認めるとともに、大切な仕事をしていることをみんなで確認し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当番の仕事への責任感 ・できるようになる自信 ・認められる喜び
3学期	↓	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校でも役に立つ場面があることを伝えていく。 	↓

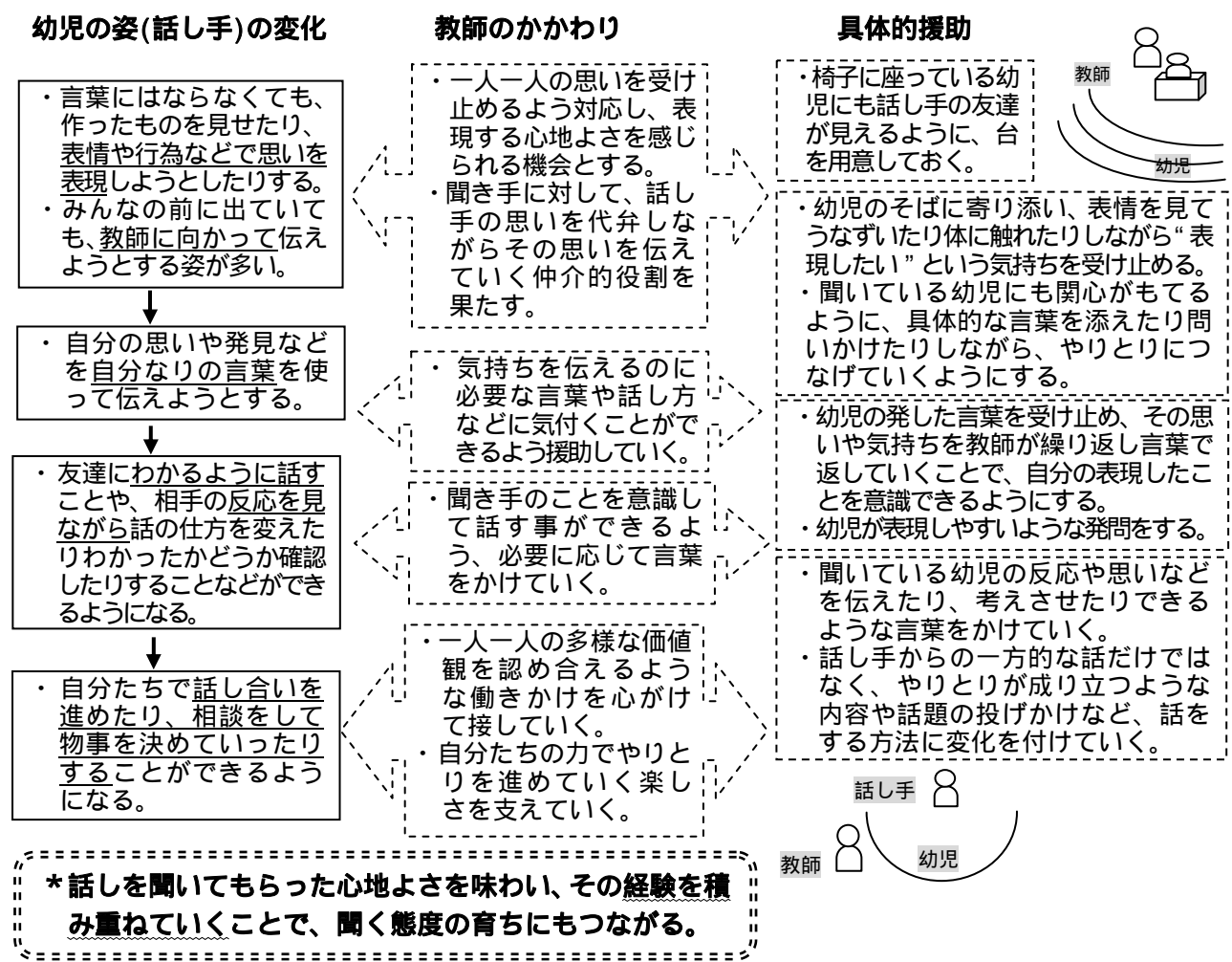
<考察・・・幼小連携の在り方の視点から>

- ・『当番活動』への教師のかかわりを見直し、『洗う・絞る・ふく』という生活技術を身に付けることを狙って、意識的に援助し続けたことで、当番の仕事が確実に身に付いた。
- ・当番という、特別なポジションを任されることにより、意欲・責任感・みんなのために役に立つ喜び等の大切な心情がはぐくまれる場面となった。（他にも、上記のような心情意欲が育つことが確認できた。）
- ・日常的な当たり前の生活の中に指導の機会があり、自信や有能感が育つことがわかった。
- ・食事の前にテーブルをふくということは、幼児にとってわかりやすく必然性のある活動だったため、長期間にわたって行い、どの幼児も経験することができた。
- ・長期にわたり繰り返し行ったことで、初めのうちはできなくても「次は頑張ろう。」という前向きな気持ちをもつことができた。
- ・教師が幼児のその時々姿を受け止め、個々に応じた支援をしたことで、より成果が上がった。

以上のように、教師が意識的にかかわることで生活の技術を無理なく身に付ける幼児の姿が見られた。このような力を幼児期に身に付けておくことが、小学校生活での自信や安心感につながるのではないだろうか。



<活動名>	表現する意欲を育てる教師のかかわり
<ねらい>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の感じたことや気付いたことを表現し、友達に伝える喜びを味わう。 ・友達に伝える方法を自分なりに工夫して表現する。 ・友達の話に興味をもって聞く。
<方法>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日の集まりの時間に、それぞれの幼児が自分の気付きや思い、発見したこと、作った物など話したり伝えたりする場面を設定する。
<留意点>	<ul style="list-style-type: none"> ・話すことと同時に、人の話を聞く姿勢を身に付けることを大切に考え、幼児の発達の状態に応じた隊形を考慮していく。 ・基本的には、話をしたい幼児が自発的に話すという形をとるが、遊びの中での幼児の気付きや表現を教師が意識して取り上げ、普段表現することに消極的な幼児にも話をする機会が得られるようにする。



<考察・・・幼小連携の在り方の視点から>

教師が、幼児の行動や仕草などから、その気持ちを感じ取り、言葉にならない思いを理解していく姿勢をもったことで、幼児は教師に自分の思いを受け止めてもらう経験を繰り返すことができ、表現する意欲につながっていったと考える。

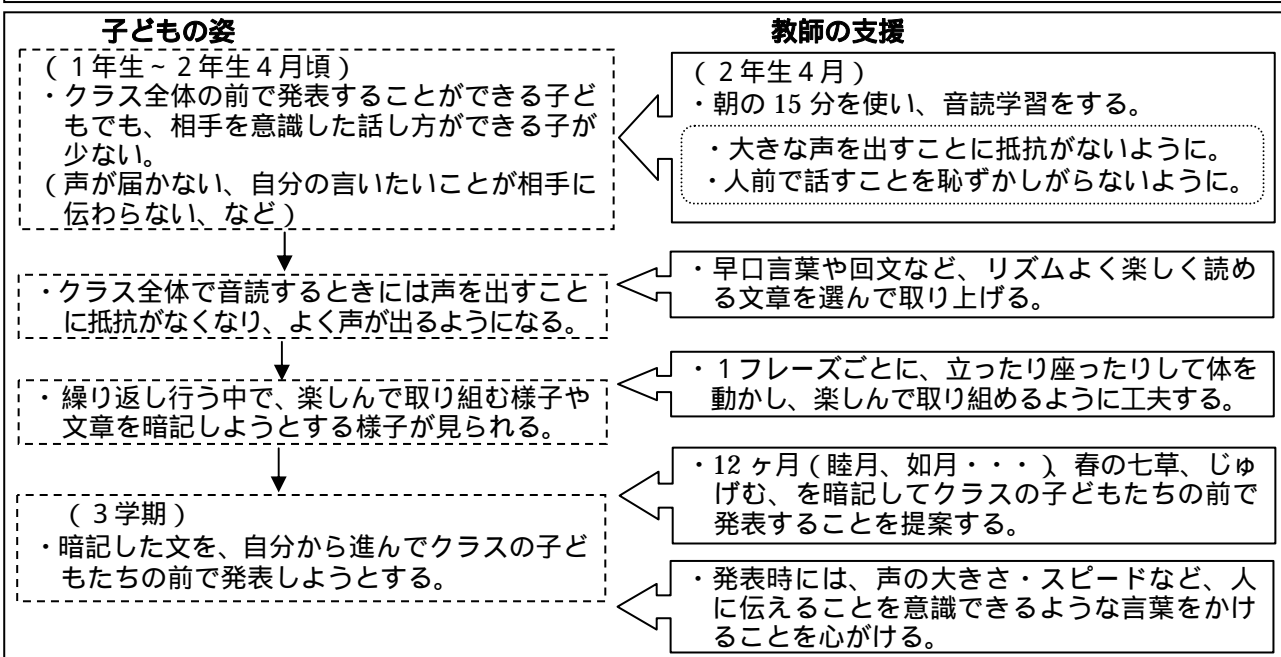
日々の保育の中で、幼児が言葉に興味をもち、自分の思いを伝え、他者に受け止めてもらう場面をつくっていく**環境の構成**を心がけ、その中で個々に必要な言葉を伝えたり、気付かせたりしながらやりとりを繰り返す**直接的援助**を続けたことで言葉が育ち、それと共にコミュニケーションが深まり、気持ちを共有した心の交流が促された。

教師や友達とコミュニケーションを図るためには、何らかの形で自分の思いを表現することが必要である。人とのかかわりが言葉の育ちを促す大きな要因と考え、幼児の心の安定を生活の基盤にして、様々な経験の積み重ねの中で人とのかかわりを十分に図りながら、言葉の育ちを促していくことが大切になってくる。

以上のように、表現する意欲をもつことや言葉を育てることが、人とのかかわりを育てる基となり、幼稚園生活から小学校生活への移行の際にも大きな力となるのではないだろうか。

事例3 C小学校 2年生

<活動名> クラスで取り組んだ音読学習 2年生4月～3学期
<ねらい> ・言葉の使い方を生活の場で意識し、相手を思いやる言葉遣いができるようにする。
 ・自分の思いを伝えられるよう、聞くこと話すことの大切さを常に心がけるようにする。
 ・音読学習を通して、声の大きさなど相手に伝えることを意識できるようにする。



<考察・・・幼小連携の在り方の視点から>
 2年生になってから、1年間音読学習を続けたことで、子どもたちに人前で話すことの抵抗が少なくなってきた。同時に、相手に注目して聞く姿勢も身に付いてきた。
 話し方の機能的な面(声の大きさ・スピードなど)は音読学習で学ぶことができたが、話す内容に関しては、話し言葉の大切さを認識させるような働きかけを学級全体で行ったり、個別に指導したりすることを心がけた。
 教師が『人前で話すことが苦手』な子どもたちの実態や発達をとらえ、子どもたちの育ちに合わせて工夫した活動を取り入れたことで、子どもたちの中に『みんなの前で話すことに抵抗がなくなる』、『声を出して読むこと・話すことに楽しく取り組むことができる』姿が生まれた。
 幼児期から小学校入学当初の子どもたちは、言葉を使って抽象的な表現をすることは難しいとされている。幼稚園生活の中では、身近な親しい人たちとのかかわりの中で、身振り手振りを交えた表現でコミュニケーションを図ることが多い。また、周りの大人たちが足りない言葉を補ったり仲立ちをしたりして、コミュニケーションの手助けをしてもらえることが多いと考えられる。このような子どもたちにとって、小学校入学当初に『授業の中で発表する』経験は、戸惑う場面だったのではないだろうか。そのような子どもたちの発達をとらえ、気持ちに寄り添った支援をしていくことが、幼稚園生活から小学校生活への移行を滑らかにしていくと思われる。

事例4 D小学校 2年生

活動名 ゲー・チョコキ・パー・ゲーム
ねらい ・体を動かしたり声を出したりすることで、開放感を味わう。
 ・友達とのやりとりを楽しむ。
 ・自分にも自分なりの力があるという有能感を感じる。

教師の思い
 学年当初、子どもたちの仲間づくりが十分にできていない時期に、ゲームを行うことで学級づくりに役立てたいと考えた。
 このゲームを選んだのは、次のような理由である。
 ・捕まったり助けたりすることを繰り返すので、勝ち負けをあまり意識せずに行える。
 ・広い場所を走り回り、開放感を味わえる。
 ・助けたり助けられたりすることを繰り返し行う中で、仲間意識が育ち友達関係がよくなっていく。

ゲー・チョコキ・パー・ゲームの方法
 ゲー・チョコキ・パーの3チームに分かれる。
 (帽子の色などでチームの区別をする)
 ゲーはチョコキを、チョコキはパーを、パーはゲーをタッチして捕まえ、自分の陣地に連れてくる。
 捕まったら、相手の陣地のふちに足をかけ、手を伸ばして「助けて」や「お助け」と言って大きな声を出す。
 味方にタッチしてもらえると自分の陣に戻る。

エピソード1 Aさん（自己中心的な行動が多く、友達とのトラブルが多い）

活動の様子	Aさんの気持ちや変化	子どもに見られた育ち
<ul style="list-style-type: none"> 味方を助けたとき、自分が捕まってしまった。 助けた味方に「ありがとう。」と感謝された。 捕まってしまうが、味方に助けてもらう。 	<ul style="list-style-type: none"> Aさんの気持ちや変化 自分が犠牲になったが、みんなの役に立てて嬉しい。 素直に「ありがとう」と感謝の言葉を言う。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもに見られた育ち 仲間意識 協力 共感性
<p>味方を助けたり「ありがとう」を言えたりしたAさんに対し、場面をとらえて声をかけ、認めていることを伝える。</p>		

エピソード2 Bさん（運動に自信がなく、引っ込みがち）

活動の様子	Bさんの気持ちや変化	子どもに見られた育ち
<ul style="list-style-type: none"> 自分の陣地から動かずにいることが多い。 捕まってしまったが、味方に助けてもらった。 捕まった時、友達と一緒に手をつなぎ、つながって助けを待つ。 味方を助けて、感謝される。 	<ul style="list-style-type: none"> Bさんの気持ちや変化 すぐ捕まったらどうしよう。 助けてもらって安心した。 また、やってみよう。 捕まったけれど、友達と一緒に楽しい。 自信をもって走り回る。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもに見られた育ち 自信 有能感 自己決定
<p>教師もゲームに参加し、捕まったり助けたりすることを繰り返してモデルになり、安心して参加できるようにする。 陣地に留まるか陣地から出て行くかについては、本人に任せ、自己決定することを待つ。</p>		

エピソード3 ルール作り

活動の様子	子どもの気持ちや変化	子どもに見られた育ち
<ul style="list-style-type: none"> (4月頃)ルールがよく理解できないままゲームが進む。 けんかが起きたり、ゲームがスムーズに進まなかったりすることが多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの気持ちや変化 ゲームがつまらない。 嫌な思いを味わう。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもに見られた育ち
<p>ゲーム終了後、次のようなことに留意しながら話し合いの時間をもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの思いを聞き、味わった気持ちを受け止めて共有する。 ゲームの中でよい場面があった場合は、みんなの前で認め合う。 困った場面を話すときには、個人攻撃にならないように、個人名を出さずに状況だけを話すよう働きかける。 みんなが前向きになり、気持ちよく終わるように話の交通整理をする。 		
<ul style="list-style-type: none"> ルールを理解し守って参加する子が増え、ゲームがスムーズに進む。 自分たちに合ったルールづくりの話し合いができるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ゲームが楽しい。 自分たちに合ったルールをつくりたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 工夫 折り合い

<考察・・・幼小連携の在り方の視点から>

このゲームは、勝ち負けをあまり意識せず、助けたり助けられたりすることを繰り返すゲームである。回数を重ねる中で、気持ちをコントロールする力や自発性などが育つ場面が見られることが多くあった。

ゲームを行う中で、子どもたちの参加の様子を見ながら『認め』や『励まし』の声をかけること、また、ゲームに慣れないうちは、ゲームの終了時に「困ったことはなかった？」と投げかけてルールを確認したり、自分たちに合わせて工夫したりするなどの話し合いの時間を保障することが、子どもの育ちを支える上で有効だったと感じられた。

遊びやゲームは、子どもが身体を動かして積極的に取り組めるものであり、幼児期、小学校期を通して、人との関係を学ぶ大切な要素が多く含まれている。子どもたちが、ゲームや遊びを通して獲得するものは多いと考えられる。小学校に入学した当初、幼稚園で行ったことのあるゲームを意図的に取り上げて行うことで、小学校生活への不安が軽減することもあるのではないだろうか。

- ・幼児期や学童期に、ゲームを通して心の発達の課題に取り組めるものが他にも多くある。
〔例〕 おたすけこおりおに ねことねずみ たかおに いろおに ドッジボール

研究のまとめ

1 研究を通して見えてきたこと

幼稚園生活から小学校生活に子どもの育ちをつなげるための教師の援助

- ・幼稚園や小学校で日常的に繰り返し行ってきた活動を『**幼小連携**』という視点で見直し、教師が意識的にかかわる。
- ・幼稚園や小学校の生活の中で、生活習慣や生活に必要な技術を身に付ける機会を大切に扱い、「**乗り越えやすい課題を取り上げる**」・「**繰り返し経験できる時間を確保する**」・「**取り組んでいる子どもの姿を認めて励ます**」ということに配慮しながら取り組む。
- ・子どもの気持ちに寄り添いながら、**心の発達を見通して**かかわる。
- ・子どもと教師の**基本的信頼感をベースとして**、自己肯定感や他者に対する信頼感をはぐくむ。

援助を行う上での留意点

- ・基本的生活習慣や生活の技術等は、その年齢なりに身に付けていくことが望ましいと考えられるが、技術を身に付けさせることだけをねらうのではなく、生きた力として身に付き**自尊感情に結び付くような伝え方**を心がける。
- ・特に幼児の段階では、**生活や遊びを通して**、生活に必要な様々な力をはぐくむ。
- ・発達の個人差を十分に考えて、**個々に応じた対応**をしていく。

このような援助を進める中で、子どもたちが十分な経験を積み重ねること、また、幼稚園から小学校への接続期に、育ちのつながりの見通しをもって指導に当たっていくことが大切であると考え。そのためには、幼稚園・小学校の教師が、お互いの生活を十分に理解し合った上で、それを意識して日々の指導に当たることや、子どもの育ちの過程を見通した上で、その子の発達に応じた環境やかかわり方をあらためて見直すことが必要だと思われる。

2 今後の課題

昨年度からの課題であるが、今年度は取り組むことができなかった

- ・幼小連携の年間計画への位置付け
- ・幼稚園と小学校のカリキュラムをつなげる
- ・幼小に限らない長期の育ちを見通した連携

などについて、今後更に考えていくことが必要と思われる。

最後に、研究を進めるに当たり適切なお助言をいただきました先生方、研究にご支援、ご助言をくださいました先生方をはじめ学校（園）教職員の皆様に、心より感謝し厚く御礼申しあげます。

【参考文献】

- | | |
|-----------------------------|-------|
| 原田 正文『こころの育児書』エイデル研究所 | 1995年 |
| 佐々木 正美『佐々木 正美シリーズ』子育て協会 | 2000年 |
| 全国公立幼稚園長会「幼稚園じほう」(8月号、10月号) | 2004年 |

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------|-------|
| 大妻女子大学教授（川崎市総合教育センター専門員） | 柴崎 正行 |
|--------------------------|-------|